

住居跡を掘る

床面が語るもの

住居跡は、発掘調査で建物の床面や柱の跡を見つけることによって確認できます。

竪穴住居は、縄文時代から奈良時代を中心に作られてきましたが、発掘された住居跡の床面は左図のように、時代を追って変化しています。これは、いったい何を語っているのでしょうか。

県内で発掘された竪穴住居は、時期によって図の1から4のように変化しています。炉の跡(図中 印)も、床面の形に変化が見られます。

弥生時代中には中央にある炉の跡が(図1) 弥生時代終りごろには壁際に寄っていきます(図3)。それまで木を組むだけだった建物の側面に板壁を立てることで、屋根を高くすることができ、壁際で火を炊くことが可能になったのです。この壁を立てる構造が、やがて掘立柱建物へと発展していきます。

また床面の形が変化しているのも、屋根の形をはじめ、建物全体の形や造りの変化にもなるものと考えられます。



住居跡の発掘作業風景

山の斜面に建つ建物

平地に近い山の裾斜面の発掘調査をするとき、かならずと言っていいほど、古墳時代終りから奈良時代ごろの掘立柱建物跡が見つかります。

急な斜面を削って平らにし、削り出したその土を谷間の斜面に貼り付けて床面となる平坦部を作り、住居を建てたようです。山の斜面という条件の悪い場所にわざわざ建物を建てる利点はあったのでしょうか。

低地は可能な限り耕地として利用して生産性を上げられることや、強い季節風や洪水を避けられる点などが考えられます。また、尾根上よりすくでも耕地に近い、山から降りた裾付近の斜面のほうは、なにかと便利だったといえることもあったでしょう。

現在でも山裾に立つ家が見られますが、当時の名残りかもしれません。



松江市長海町



オノ峠遺跡(松江市竹矢町) たくさんの柱穴は、この斜面に掘立柱建物があったことを示す。



図1



円形住居



安来市・宮内遺跡 (弥生時代中ごろ)



安来市・越峠遺跡 (弥生時代後半～弥生時代終り)

図2



多角形住居



安来市・岩屋口遺跡 (弥生時代終り～古墳時代初め)

図3

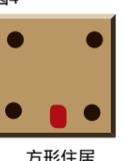


隅丸方形住居



安来市・岩屋口遺跡 (古墳時代中ごろ)

図4



方形住居

炉からカマドへ

古墳時代後半になると、竪穴住居跡にはカマド跡が見られるようになります。カマドには、煙が建物内に充満したり、火が燃え移ることがないという防火上の利点のほか、熱効率が高まるなどの利点もあったと思われる。さまざまな利点を持つカ

マドは、渡来人系の人たちによって伝えられたのち、たちまち全国に普及しました。カマドの普及によって、住居の中に台所としての場所が確保されるようになります。このため住居の中での生活の仕方も、炉があった時代とは異なりました。カマドの出現は、人びとの暮らしがぐっと大きく変化させたと考えられます。しかし山陰、とくに出雲地方では、床で

直接火をたぐるときに使用したと思われる土製支脚が比較的多く出土します。住居の中に作りつけるカマドは、出雲地方のような平野部よりも、山間部で多く用いられたようです。

また掘立柱建物跡からは作りつけのカマドは見つからず、炉の跡も少ないことから、移動式のカマドや土製支脚を利用したと考えられます。

古代のカセット「コンロ」？ 土製支脚

古墳時代から奈良時代にかけて使われたものです。いつでもどこでも使える、便利な道具だったと考えられます。



使用想像図

石田遺跡出土 (安来市吉佐町)



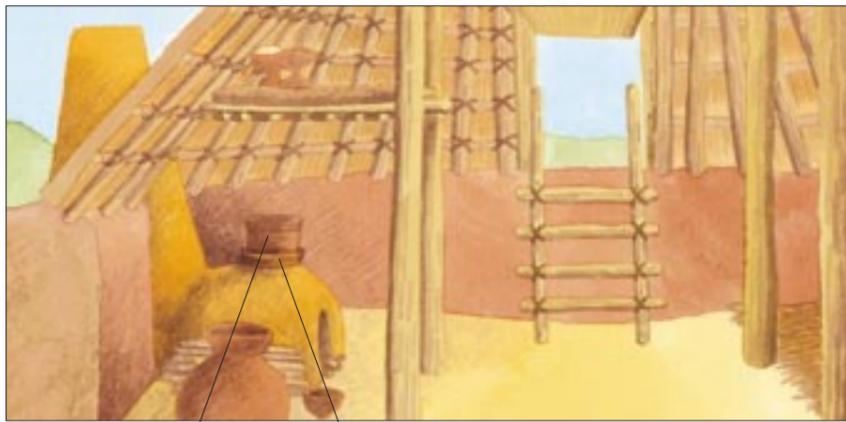
儀式で大活躍！ 移動式カマド

結婚、出産など慶弔時には、このカマドで調理がされたと考えられます。

よつぎニ 四ツ廻り遺跡出土 (八束郡東出雲町)



使用想像図



カマドがある竪穴住居の内部の様子 (神奈川県立埋蔵文化財調査センター編『神奈川県立埋蔵文化財調査センター開館10周年記念展「住まい」の考古学』を参考に作成)



鉢

甕



石組み



飯石郡頓原町の森遺跡で発掘された、カマドを備えた住居跡。石を組んで、カマドの骨組みを作った様子がよくわかる。とって付いた甕(土製の蒸し器)も見つかっている。



とって付きの甕